

# うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより

第27号

2019(平成31)年3月26日

(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

## 初めての大和機 — 経張力調整機能を有する織機 —

大和機(やまとばた)の最大の特徴は、経糸(たていと)の張力(テンション)の緩さにあります。飛び杼式の水平高機、いわゆるチョンコ機(「チョンコ」とは、杼を左右に飛ばすときに生じる音に由来する)に慣れた者にとっては、最初は戸惑うばかりです。「緩く、ゆるく」と言い聞かせていても、自然と張り(テンション)が強くなってしまいます。そうすると綜統(もじり)の動きが鈍り、上糸と下糸の開口がうまくいかず、杼(ひ)を通すことができなくなります。その反対に緩くしすぎると、杼が下糸の上を滑り抜けることができず、糸の間から杼が落ちてしまいます。また、箄(おさ)を打つ最適な位置も、自分で調整しなければなりません。経糸が緩く、箄を打つ位置も綜統も不安定であるため、緯糸(よこいと)を打ち込むときの要領もチョンコ機とは大きく異なります。

綜統を上下させる踏み木は、両足のつま先で踏みます。杼は必ず右から通します。チョンコ機で織るときには、まず右の踏み木を踏み込み、上糸と下糸を交差させて開口します。その間を、右から左へと杼を飛ばし、次に左右の踏み木を踏み揃え、上糸と下糸の高さを揃えてトントンと箄を2回打ち込みます。つづけて、左の踏み木を踏み込み、再び箄をトントンと2回打ち込みます。杼を左から右に飛ばすときには、同じ要領を左右を逆にして繰り返します。この動作をリズムカルに行うため、私は心の中で次のようにつぶやくようにしていました。

「右踏んで、左に飛ばして、揃えてトントン、左踏んでトントン。右に飛ばし、揃えてトントン、右踏んでトントン」。箄を打ち込むときの強さも、「揃えてトントン」の時はやさしめに、「踏んでトントン」の時はやや強めにします。経糸のテンションが強くほぼ一定で、箄を打ち込む位置も綜統も安定しているため、リズムを保つことでどンドンと織り進むことができました。

ところが、大和機では勝手が違います。右の踏み木を踏み込み、右から左に杼を通すのは同じですが、上糸と下糸を揃えて箄を打ち込む時に、テンションの緩い経糸に緯糸がうまく絡むように、両足の踏み木を小刻みに振動させ、軽く4回ほど打ち込みます。次に左の踏み木を軽く踏み込み3、4回打ち込み、さらに深く踏み込んで3、4回打ち込みます。ただし、この「軽く」「深く」も必ずしも一定ではなく、そのときの箄の位置や経糸の張力の加減によって調整します。打ち込みの回数も、トータルで7、8回の時もあれば、10回を超える場合もあります。つまり、経糸のテンションや箄の位置、綜統の位置が絶えず変化するため、その時々状況に応じて手と足の動きを自分で調整する必要があるということです。当然、時間もかかります。大量生産には不向きです。

大和機を使いこなすには、それなりの熟練を要したということの意味がよくわかります。そして、明治時代に飛び杼式の改良水平高機が発明されて以降、瞬く間に大和機が姿を消してしまった理由も。初めて大和機にのぼり、まだ250cmほどを織ったばかりですが、「だからこそ大和機にこだわりたい」との思いを新たにしています。



大和機で紺の縦縞伊達縞を織る

### Monthly Data

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成31年2月24日～平成31年3月23日)

東京都1、神奈川県2、鳥取県1、福岡県1、熊本県1、大分県1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成31年2月24日～平成31年3月23日)

メールを含む各種相談件数6、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数4件6名



## 《綿の栽培記録 2019》 — 平成31年度版 その2 —

今年は2月から3月中旬にかけてほんとうによく雨が降りました。ほぼ2,3日に一度の割合で周期的に雨が降るため、畑の土が乾く間がありません。畑の土がシュルイ(天理市乙木町の方々は、水気を多く含む土壌を「シュルイ」と表現される。近世上方語の「汁い/しるい」の転訛か)と、耕耘機を入れることができません。綿は弱アルカリ性を好むとされています。そのため、例年種蒔きの約1ヶ月前頃に石灰をすき込むようにしています。5月3日の種蒔きに備え、4月初旬までに石灰をすき込んでおきたいと考え、1号畑では周期的に降る雨の合間を縫って3月初旬に、2号畑周辺では3月25日に石灰をすき込みました。なお、石灰の有無が収穫にどれほどの影響を及ぼすかを調べるために、あえて石灰を施さない畝をつくりました。写真は中：2号畑東隣畑、右：2号畑西隣畑。いずれも借地



## 《風合いについて — 植村和代『織物』より —》

大和機の特性について、大和機の復元と研究に取り組まれている元帝塚山大学教授の植村和代氏の著書『織物』(2014年 法政大学出版局刊)には、以下のように記されています。

「大和機のように固定部分が少なく製織時に経張力調整ができる織機は、良質の織物を作る大きな要素として、織手の能力が求められると推察される。…大和機は緩い経張力を基本とし、開口時に上下糸の張力が異なるという特性を持ち、且つ経張力調整機能を有して、均質で風合いのよい織物を織る織機であることが分かる。」246～248頁

### 【綿の加工の作業記録】 (梅田1人の作業量)

- ・糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿：平成28年, 2016産。丹羽正行氏による打ち綿)  
2月24日～3月23日 (作業実日数22日) 糸の総量132.2g (35.3匁) 総時間302分 (5時間2分)  
※1分間≒0.438g 1時間≒26.3g (7.0匁)

### 【研修等の記録】

- ・平成31年02月24日「子ども・若者支援専門職養成研究所シンポジウム」(奈良教育大学) 参加
- ・平成31年03月03日「相楽木綿伝承館：機織り教室専科」にて、大和機を用いて機織り
- ・平成31年03月08日「相楽木綿伝承館：機織り教室専科」にて、大和機を用いて機織り
- ・平成31年03月11日「相楽木綿伝承館：機織り教室専科」にて、大和機を用いて機織り
- ・平成31年03月11日「第10回相楽木綿作品展」(けいはんな記念公園観月楼ギャラリー) 出品、見学
- ・平成31年03月23日 和綿の繰り綿(2017年産+2018年産)3kgを丹羽正行様に送付。綿打ちを依頼。
- ・平成31年03月25日「相楽木綿伝承館：機織り教室専科」にて、大和機を用いて機織り

【以下の写真は、左：大和機を間丁(けんちょう)側から見た様子、中：織り付け部分、右：同部分の始末の様子】

